

大豆と水稲の冠水後の対応について

令和3年7月8日
鳥取県産米改良協会

梅雨前線の影響で7月7日には県内各地で200ミリから300ミリを超える大雨となり、各地で大豆と水稲の冠水が報告されています。気象予報では、本州付近に梅雨前線が停滞するため、10日頃にかけて大雨となるおそれがあると予想されていますので、引き続き注意しましょう。

冠水を受けたほ場での対応については、作物体のダメージを回復させるため（回復可能か様子をみた後）、次の管理を行うことを基本とします。

1 大豆

(1) 冠水後の対応

①まずは排水に努め、（排水溝につなげて排水）ほ場の乾田化を図る。

②農業共済に連絡し、現地確認をしてもらう。

大豆は経営所得安定対策の対象作物でもあるため、減収等が見込まれるほ場は、必ず、農業共済または地域農業再生協議会に現地確認をしてもらう。

③ほ場が機械耕耘・整地できる状態になってから、播き直しするかどうかの判断をする。

【播き直ししない場合】

④冠水により大豆の生育停滞が予想される場合は、排水作業によりほ場が乾き、管理機がほ場に入れるようになってから、早めの中耕培土を行う。

その際、葉が黄化して大豆が弱っている場合は、窒素で2kg/10aを施用し、早めの中耕培土を行う（硫安や尿素を用いる）。

⑤密播栽培は排水に努める。

⑥病害の発生

・ダイズ黒根腐病：防除効果が高い薬剤はないので排水に努める。

・ダイズ茎疫病：白大豆では発生しにくいですが、排水に努め、発生が見られたらリドミルゴールドMZ等の防除薬剤を使って防除する。

【播き直しする場合】

⑦通常播種の場合、2割程度播種量を多めにし、遅くとも8月初めまでに播種する。狭畦密播の場合は、最大限の播種量を設定しているため、基準どおりの播種量とする。

(2) 播き直しの判断基準

①出芽前の冠水・・・播き直し

②子葉初生葉までの冠水・・・ほ場乾燥後に判断

③ステージを問わず、作物体全てが冠水した場合・・・ほ場乾燥後に判断

・山口県の試験事例では本葉1葉、4葉では、冠水24時間までは異常がなく、48時間たつと大豆の一部が腐死したという報告がある。

・農業試験場の大豆ほ場では、冠水時間は24時間未満であったことから、排水対策を施し、排水が進む条件であれば播き直しの必要はないと考えられる。

※ほ場が乾き、また農業共済の現場確認後

※除草剤（土壌処理剤）については、再度の散布はできない。また、耕耘すると広葉剤成分が薬害の要因になる可能性もあるため、注意が必要。

2 水稲

- ①稲体が柔らかくなっており、回復するまでに4～5日はかかると想定される。
- ②いきなり中干しを行うと、水稲の活力が低下するので、4～5日は飽水管理に努める。
- ③移植後間もないほ場については、②の管理で水稲が回復し次第、地域暦に掲載している中間追肥か、即効性の窒素肥料を窒素成分で1 kg/10 a 程度施用し、生育回復を促す。
- ④目標茎数を確保しているほ場では、水稲の回復を待ってから中干しをする
- ⑤幼穂形成期を迎えているほ場では、湛水管理を行い、適正な時期に穂肥を散布する。
- ⑥病害の発生
 - ・白葉枯病：抵抗性誘導型の箱剤を使用している場合は、7月下旬～8月上旬までは防除効果が持続すると考えられる。抵抗性誘導型の箱剤無施用で常発地等発生が予想される場合は、オリゼメート粒剤の本田施用を行う。